

糸電話

関西大学 社会安全学部 小澤 守

最近の子供はきっとそんなことはやらないが、ゲーム機もパソコンもテレビさえも怪しかった時代に育った筆者は、いや筆者のみならずその当時の子供たちは総じて遊びに創意工夫をしたものである。特に田舎で育ったものとしては、ある意味、自然そのものが遊びの対象であった。取入れが終わった稲の株が規則的に並んだ田んぼは格好の野球場であったし、山の斜面は自前のそりによる滑降のためのスロープであった。竹を切ってきては竹とんぼを作って遊んだこととか、たまに買ってもらった雑誌の付録に入っていた日光写真に心躍らせ、初めて村にバスが入ってきたときなどは、まさしく文明の香りとばかりにボンネットバスの排気管から出てくるガスを吸いに行ったことを今でも鮮明に覚えている。

糸電話で遊んだのもその類であった。厚紙を丸めて筒を作り、一方の端にハترون紙を貼り付け、糸を通すだけで出来上がる簡単なものであるが、ハترون紙の貼り具合や糸の取り付け方は通話に大きく影響し、また双方の筒をつなぐ糸を適切にピンと張っておかないと声はとどかない。

糸電話の糸の中を伝播するのは弾性波であるが、この波を電気に変換したら電話になる。阪神淡路の震災直後に筆者は家族の無事を実家に連絡するために、娘たちの貯金箱から掌いっぱい10円玉を取り出し、自転車に乗って昔ながらの公衆電話を探しに出かけた。家の固定電話は停電のために使えず、当然、当時の公衆電話はすでに多くがテレホンカード対応になっており、きっとこれらも使用不可であると判断したためである。昔ながらの電話は電柱からの電源によらず、NTTと電線でつながっているため、電話線が切れていない限り使用できたのである。自宅のある長田から湊川公園までたどり着いてようやく目当ての公衆電話を探し当て、家族の無事を知らせた。当時、すでに携帯電話が出始めていたが、まだまだ大きく高価で、数も少なかった。そのためか、携帯電話の有効性が喧伝され、携帯神話が生まれたように思う。

事実、3.11（東日本大震災）の折にはアッとと言う間もなく、携帯電話が極度に多数のアクセスのため機能しなくなった。携帯電話は上記の電話線の代わりにあちこちのビルの屋上に設置されたアンテナを通じた空中無線通信で、それぞれ受信容量に限界がある。また地震災害などでアンテナが損傷したとか、アンテナからの信号を取りまとめる基地局が損壊あるいは停電になれば役に立たなくなるのは誰にでも理解できる。

大学には多くの学生が通っている。講義などあるときには教室などでチェックがある程度はできるが、休日や夜間に災害が発生した場合には、学生（教職員ももちろん）の安否確認が必要となる。大きな災害でなければいいが、携帯電話のアンテナや基地局が損壊するような場合には、当然ながら携帯電話（最近ではスマートフォン）を通じての安否確認は適切でなく、できたとしてもかなり後になる。激甚な災害ではより一層の日数が必要となるだろう。そのようなことから、筆者は、数年前のとある会議での一斉メールを送ってその返信で

安否確認をするとの提案に対して、それも否定はしないが、究極の安否確認手法を決めておく必要がある旨の発言をした。驚いたのはその会議席上、出席者のお一人から、コンピュータのデータバックアップは遠く離れた別の場所にあること、また例えコンピュータが損壊してもクラウドを使用しているので問題ないといった発言があった。そもそもインターネットが使えなくなるとか、携帯電話の基地局やアンテナは損壊しないことを前提とした発言にひどく驚くとともに、地震があっても自らの関係する建物、道路の損壊以外には何も損壊しないといった能天気な発想にあきれ果てたのである。

社会の安全を考えると、究極的には個人と個人を直接結ぶタフなシステムの構築が必要である。それには、顔も見ないで片言の情報（多くは役に立たないデータ）を送るスマートフォンに頼るのではなく、顔と顔を直接付き合わせることで、糸電話遊びのようにピーンと張った糸で結ばれた相手の言葉を何とか聞き取ろうとすること、そのような行為を広く行きわたらせ、土台とすることが重要なのではないだろうか。

